



私には子供の代わりで、まさに「目の中に入れても痛くない」という表現ができる愛犬が二匹いる。だから、新潟の震災後の様子を伝えるニュースを見ていて、ペットに関する悲しい報道がでるたびに胸が痛む。

被災地から連れて行けず、やむなく置き去りにされたペットたち。人と違って、話すことも状況を理解することも、自分たちで生きていくこともほとんどできない。テレビで、避難

ジーアンドエス社長 萩原 扶未子

所の片隅でペットをいとおしそつに抱きかかえている人がいたが、多くの避難所は、ペットを連れて行くことが許されていないようだ。やむなくペットと一緒に車で寝起きをしていて、エコノミークラス症候群で亡くなったという痛ましい出来事まで起きてしまった。

人間で言えば八十歳を超える老犬を、体調を崩しやすいので他に預けられないと毛布にくるみ、自分たちも毛布をかぶって寒さをしのぎながら、睡眠時間三―五時間交代で面倒を見る兄弟もいた。私もそうするだろうと、人ごみではなかった。

今、被災地で置き去りにされたペットの野生化による問題や、避難所ではかの人とペットの関係で困っている人がたくさんいる。ペットを飼われている被災者の方にとって、家族同然のペットがストレスなく、そばにいてくれるかどうかは、心理的に大きな影響がある。

# 被災地のペットの存在

☐ ペットロス 最愛のペットが亡くなった体験はもちろんだが、災害や飼い主の事情、行方不明などの生き別れによって生じる心理的な深い喪失感のこと。

つ人と拒絶反応を示す人の「から？」  
両極端に分かれると思う。  
私には、このことで今でもつらい思い出がある。五年前に家族同様の愛犬二匹が

相次いで老衰で亡くなった。悲しみがこころがぼろぼろになった。まさに「ペットロス」状態である。でも、周囲で理解してくる人は少なかった。「子ども同様のペットが亡くなったの……」「あ、そうですか」(だ

気持ちには理解してもらえないのだろう。  
アメリカやヨーロッパでは、被災地のペット支援専門チームも存在し、飼い主の心理的なケアも含め対処してくれる。新潟県中越地震を機に、災害時のペット支援体制を切に希望する。

「あ、そうですか」(だ